

<田布施とイワキ山ー吉田松陰と安倍氏～國體護持ー>

落合莞爾氏の一連の著書に依れば、孝明帝が偽装崩御して裏（國體）天皇となり、その皇子、睦仁親王の代わりに長州の田布施でかくまわれていた南朝系の大室寅之祐が明治帝になったという。この田布施という地域からは、維新に深く関わった木戸孝允、伊藤博文、山縣有朋などが輩出され、自虐史観から脱した歴史的談話を発表した安倍晋三氏（平成 27 年度時点の総理）の地元もここである。そういう意味で、ここ田布施は相当重要な地であり、それなりの秘密が隠されていそうである。

また、木戸、伊藤、山縣らは吉田松陰の松下村塾で学んでいるが、吉田松陰は幼名を寅之助といい、読みとしては大室寅之祐と同じである。Wikipedia 等に依ると、松陰は長州藩士・杉百合之助の次男として生まれ、叔父・吉田大助の養子となったとされているが、本姓は不明、という説もあり、謎の部分がある。また、養子先の吉田氏の本姓は藤原氏で、藤原行成の末裔とも言われており、そうなると、栄華を誇った藤原北家の流れとも言える。

松陰は、当時としては大罪とも言える脱藩を覚悟し、東北へ旅しているが、二十歳そこそこの若者がそこまで決心できた背景には何があるのか？その東北の青森では、津軽富士とも言われる岩木山を松陰は称えているが、田布施にも同じ読みのイワキ（石城）山があり、こちらは“西の高野山”とも言われている。高野山と言えは空海であり、空海は秦氏中の秦氏である。どうやら、田布施の謎を解くカギは、イワキ山にありそうである。

(1) 石城山 (Wikipedia 参照)

① 場所

山口県の大和町（やまとちょう）、旧周防國熊毛郡。田布施の北にあり、田布施の街を一望できる。伊藤博文の生誕地でもあり、幕末の第二奇兵隊本陣が置かれていた。周囲には大和、伊賀など、大和朝廷由来の地名が多々見られる。

② 神社

石城神社、日本（やまと）神社、若宮社、物部神社、五十猛（いたける）神社などがある。

石城神社の祭神は大山祇神、雷神、高龔神（タカオカミノカミ）で、神明鳥居。

日本神社は不明だが、五十猛がスサノオの子からしても、この祭神らは明らかに秦氏系ではなく物部系である。しかも、スサノオ、大山祇神、雷神＝別雷神（上賀茂）、タカオカミ＝水神（丹生川上）はいずれも海部氏系であり、丹生は海部氏のシンボルとも言える不老不死の妙薬（水銀朱＝硫化水銀）である。

③ 神籠石（こうごいし）

八合目あたりを大きな石組みの列石が取り巻いており、これらを神籠石と言う。総延長約 2500 メートル。百濟の山城の工法というのが通説で、どう見ても、磐座ではない。

神籠石は“か・ごめ・石”とも読める。最高神が籠目によって囲われ、封印されている事の暗示である。



<http://www.geocities.jp/houshizaki/iwakisan.htm>



<http://k-yagumo.sakura.ne.jp/web11/iwaki.htm>

神籠石



<http://k-yagumo.sakura.ne.jp/web11/iwaki.htm>

龍石



龍尾石



喧嘩石



<http://www.geocities.jp/houshizaki/iwakisan.htm>

石城神社



<http://www.geocities.jp/houshizaki/iwakisan.htm>

④考察

田布施を一望できるが、その南は瀬戸内海である。石城神社の祭神、大山祇神は伊予の大山祇神社の祭神で山の神だが、海神でもあり、この地の激しい海流をなだめる。そして、雷神と五十猛は武闘系だから、石城山は半島からの攻撃に備えるための神山であり、スサノオ系でもあるから海部氏の磐座由来とも言える。また、熊毛の“熊”は“熊野”と同様、これも海部氏由来であり、動物の熊の意味ではなく、“大きい”“貴い”などの意味である。

石城神社の鳥居が神明（＝神名）鳥居ということは、それは祭神が最高神であることを暗示する。すなわち、海部氏の最高神ヤーが分祀された（*）大山祇神である。大山祇神は別名・和多志神とも言われ、多くの志が和した宇宙の意思とも言えるものである。神籠石が封印している最高神とは、ヤーである。

*最高神ヤー（'）の分祀

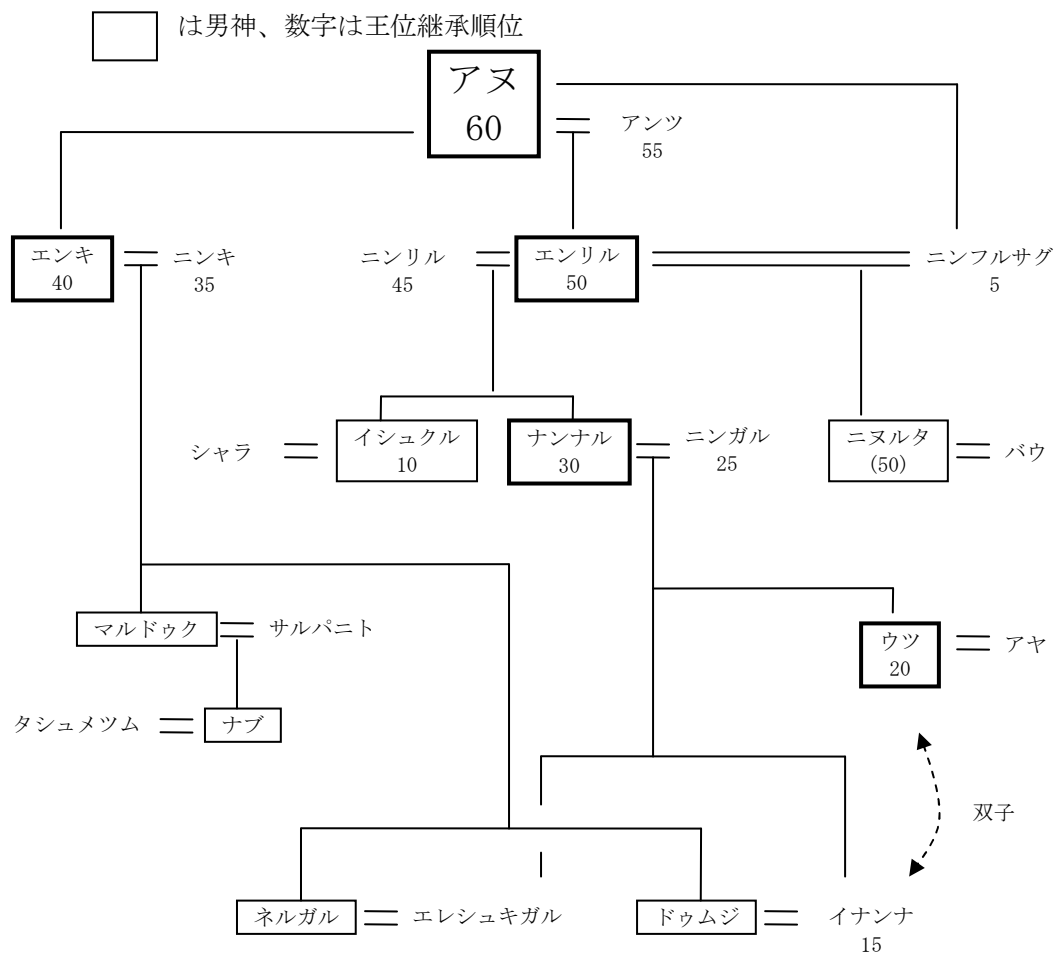
大山祇神以外に、豊受大神と天照大神。シュメールの神々に当てはめると、それぞれ海神エンキ、豊穰の女神イナンナ、太陽神ウツ。本来のヤーとは、地球のエネルギーで宇宙のエネルギーでもある国常立神だから、最高神である。

写真のような龍石（龍は籠神社を暗示する）、喧嘩石などはまさしく磐座だから、正確にはイワキ＝磐木で、磐座と神籬の暗示である。これは、大地の神（磐座、地球）と天神（宇宙）の依り代（神籬）の合体で、天地陰陽の合一を暗示する、まさに古代祭祀場である。すなわち、石城山は縄文から海部氏系へと引き継がれた海人系の古代祭祀場である。

神籠石は、おそらく山が崩れないようにする役割と思われるが、これは様式からして秦氏に依る物で、“西の高野山”というのがそれを更に裏付けるが、カバラの暗示として“籠”を入れている。

ここから瀬戸内海を挟んだ南は宇佐で、宗像三神を古い土着神として祀るが、それは縄文の女神で、本質は豊穰の女神で太陽女神、航海の女神（水神でもある）たるイナンナである。（三女神の性質。）

また、現在の神社は秦氏に依って南向きに変えられたので、参拝者は北向きとなるが、幕末の長州勢の場所として、この山を北に拝する田布施が選ばれたのは、さもありなん。落合莞爾氏に依ると、長州は半島からの流入が多く、幕末に西洋霸道主義に感化された革命が最も起きやすかった。それは、皇室・王室を破壊して共和制を目論むもので、國體護持に危機を及ぼす。その連中をなだめ、革命の被害を最小限に抑えるために、ここから明治の指導者を輩出させた、とのこと。だとすれば、やはりそういった人たちを配する場所としては、この国の本来の祭祀形態である縄文や海部氏系の神々や神山を拝する場所以外に無い。幕末の田布施勢に囚われてしまうと、このようなことが見えなくなる。



(2) 岩木山 (Wikipedia 参照)

岩木山は、古くから山岳信仰の対象とされていて、山頂には岩木山神社奥宮がある。毎年旧暦 8 月 1 日に行なわれる例大祭「お山参詣」は、五穀豊穰や家内安全祈願のために御来光を拝む修験系の祭りであり、2 日前から行い、最後は岩木山の神霊の力を宿すものとされる。これなどは、“西の高野山”に対するものと見なして良いだろう。吉田松陰は十三湖から岩木山を眺め、“山は瀉に臨みて岩城山に対す。真に好風景なり”と述べている。

① 祭神

岩木山神社には、五大柱の神である岩木山大神が祀られている。すなわち、顕国魂神 (ウツシクニタマノカミ、= 大国主神)、多都比姫神 (タツビヒメノカミ、= 宗像三神の湍津姫神)、宇賀能売神 (ウカノメノカミ)、大山祇神、坂上刈田麿命 (サカノウエノカリタマロノミコト、坂上田村麻呂の父) である。

大国主神は出雲系で、海部氏と同族。多都比姫神は宗像三神で縄文の女神イ

ナンナ。宇賀能売神＝豊受大神で、これも豊穰の女神イナンナだが、本来の根源神、国常立神でもある。大山祇神は石城山と同じ。

坂上田村麻呂が山頂に社殿を再建したということだが、それは岩木山大神の加護によって東北平定を為し得たため。東北平定は東国征伐と同義であり、海部氏系を封印すること。

以上、岩木山と石城山の祭神は根本的に同じ海部氏系の神々と言える。

②安寿と厨子王丸伝説

岩木には、安寿と厨子王丸伝説がある。安寿と厨子王丸は、丹後国の郎党、大江時廉の陰謀によって滅ぼされた岩城正氏の子とされている。その安寿が岩木山に祀られているという。

・伝説概略

筑紫の国に流された父を尋ねて母と共に越後を旅立った姉弟、安寿と厨子王。旅の途中、人買いに取られた母は佐渡へ、姉弟は丹後由良の山椒大夫の所へと売られた。姉は命と引き替えに弟を逃がし、都へ出た厨子王は丹後国主となって悪人を成敗し、盲目となった母と再会した。

実は、丹後にも同様の伝説が残されている。もし、丹後が本当に悪ならば、そんな伝説がわざわざ丹後に残ることは無いだろう。ここで重要なのは、厨子王は丹後国主となったことである。ならば、本来は丹後国の者だった、という解釈は成り立つ。岩木山の祭神が海部氏系であることからすると、こちらの解釈の方が説得力がある。

岩木山当地には、岩木山の神は丹後国の人を忌み嫌うという言い伝えがある。丹後国の人が入ると風雨が続く悪天候となり、船の出入りができないとして厳しい吟味が行なわれ、入り込んだ丹後国の人を追出されたという。それは、岩木山で祀られているとされる安寿の祟り、とでも言うべきものだが、最終的に丹後国主となって悪人を成敗し、盲目となった母と再会したわたげだから、一件落着ということで、この言い伝えの信憑性は疑われる。津軽藩が自らの苛政を隠蔽し、領民の不満を丹後人に向けて逸らせようとする策であった、という説もあり、これならば、ある意味、納得できる。また、坂上田村麻呂も鬼退治と同義と見なせば、押し込められた“鬼”は海部氏系の暗示でもあり、岩木山の祭神と併せ、安寿と厨子王丸伝説にも丹後が封印されていると解釈できる。

以上、岩木山は祭神、伝説共に海部氏系と深い繋がりがある。

(3)安倍氏

青森（津軽）の岩木山は、吉田松陰が訪ねているだけあって重要で、田布施の石城山と同義であることが判明した。この東北と田布施の関係は、実は安倍氏に深く関わる。Wikipedia と以下のページを参考に考察しよう。

http://www.kajika.net/furusawa/010818_1.htm

・安倍氏は婚姻などによって勢力を拡大し、忠良の子、頼時の代に最も勢力を広げた。安倍氏は北上川流域の奥六郡（岩手県内陸部）を拠点として糠部（青森県東部）から亘理・伊具（宮城県南部）に至る広大な地域に影響力を発揮していた。しかし、頼時が朝廷と対立し、源頼義率いる討伐軍により戦死し（前九年の役）、その後を継いだ子の貞任も敗北した。頼時の三男・宗任、五男・正任は、それぞれ伊予、肥後に配流された。また、亘理の豪族・藤原経清の妻となっていた頼時の娘は清原武貞の妻となり、息子（藤原清衡）も武貞に引き取られ、養子となった。清原氏は安倍氏の地位を受け継いだ。後三年の役で滅亡し、藤原清衡がその地位を継承して、奥州藤原氏による黄金時代が築かれた。

その貞任の次男・高星丸は乳母に抱かれて厨川柵を脱出し、津軽の十三湊（とさみなと）に落ち延びた。高星丸は後に安倍姓を改めて安東姓となり、安東水軍を起こしているが、これは宗任の末裔が九州松浦水軍を起こしたのと同じである。この安東水軍は支那などとの交易で力をつけ、秋田にも支配権を広げ、後に秋田姓を名乗っている。また、九州松浦水軍系は、安倍晋三氏の祖である。

奥州藤原氏は黄金で有名な一族だが、そこには安倍氏の地位があったのである。また、安東氏は元来、津軽地方の豪族であったとされることは、安倍氏の地位が相当のものであったことを裏付ける。その安倍氏は水軍を起こしている。元を辿れば海人族であることは間違いない。追いやられた海部氏系の村上三島水軍、九鬼水軍などの活躍からすれば、東北に追いやられた安倍氏の水軍もまた、その一族なのだろう。それが九州松浦水軍を経て、戦後、総理や閣僚を輩出した安倍一族へと繋がっているのである。

また、前述のように、吉田松陰は十三湖から岩木山を眺めて称えているが、その地が青森県五所川原市の十三湖の辺りにあった湊、十三湊で、そこを本拠にして成長したのが安東氏だから、吉田松陰もまた、安倍一族との深い繋がりが伺える。そして、“十三”は原始キリスト教徒である秦氏に深い関わりのある数字（イエスと12人の使徒）であり、“とさ”とも読ませているのは、維新で土佐も関わることとなった暗示とも言えるものである。

(4) 毛利氏

田布施は毛利氏が管轄していたが、毛利氏とは何者なのだろうか？石城山と岩木山に共通する大山祇神を祀る大山祇神社に深く関わる三島水軍・村上水軍からの流れで見てみよう。（主に Wikipedia による。）

① 三島水軍・村上水軍

石城山と岩木山に共通する海神で山の神でもある大山祇神（ヤー）を祀るのは大山祇神社だが、大山祇神社のある伊予国越智郡は古くは小千国（おちのくに）と言われ、海部氏と同族の越智氏が祭司を司り、そこから分かれたのが河野氏で、三島水軍を指揮した。そこから更に派生したのが村上水軍である。

その村上氏は能島村上家、来島村上家、因島村上家の三家へ分かれ、因島村上氏は毛利氏の家臣となり、能島村上氏は毛利家から周防大島を与えられて臣

従し、後に因島村上氏と共に長州藩の船手組となった。(来島村上氏は河野氏に臣従して越智姓を名乗ったものの、後に豊後国の玖珠郡に転封され、完全に海から遠ざけられた。)

村上氏の系図については諸説あって混乱しているが、村上水軍博物館等の系図に依れば、三家に分かれる前の村上氏の祖は村上師清(モロキヨ)で、更に辿ると清和源氏の源経基とされているが、海部氏と同族の越智氏(更に遡ると安波夜別命(アワヨワケノミコト))から派生した一族である。

村上氏の中でも最大勢力の能島村上氏は、秀吉の四国平定後の領地替えに依り、能島水軍城(愛媛県越智郡)から小早川隆景の領地・竹原に移った。以後、村上水軍は小早川・児島・乃美水軍などと共に、毛利方水軍として活躍した。

②小早川氏

小早川水軍は、毛利水軍の中核を担っていた。小早川氏は相模国を本拠地とする桓武平氏土肥氏の分枝で、鎌倉時代初期、源頼朝に仕えた土肥実平の子・遠平が土肥郷の北部・小早川(神奈川県小田原市早川付近)に拠って小早川の名字を称したのが始まりと言われている。

遠平は平家討伐の恩賞として、平家の家人、沼田氏の旧領だった安芸国沼田荘(ぬたのしょう、広島県三原市本郷町付近)の地頭職を拝領し、これを譲られた養子・景平(清和源氏流・平賀氏の義信の子とされる)が、安芸国に移住した。

戦国時代に入ると周防国大内家傘下の国人領主となるものの、世継ぎが居なくなったため、毛利家出身の興景夫人の従弟である隆景(毛利元就の三男)が養子に迎えられ、特に一族の竹原家と沼田家が統合されて以降、完全に毛利一門となり、毛利家から多くの家臣が小早川家に送り込まれた。

桓武平氏とされながら、頼朝に仕えた一族でもあるのは、単純に平家と見なすわけにはいかない。また、水軍を起し、毛利水軍の中核を担ったことは、一族が海人系であることを物語る。

源氏は義経の鴨越が有名すぎるので、騎馬系と思われがちだが、壇ノ浦合戦や頼朝が造らせた熱海の巨大な軍港が、源氏が実は海人系であることを示している。鎌倉幕府の歴史を記した吾妻鏡には、熱海には頼朝の巨大な軍港があって(実際に海底遺跡あり)、当地の有力者である三浦氏の三浦水軍以外に、三島水軍と九鬼水軍もあったと記載されている。村上三島水軍の四国、九鬼水軍の紀伊半島、頼朝が落ち延びた千葉にはいずれもアワ、カツウラ、シラハマという地名があり、これらは海人族由来のものである。また、頼朝は大山祇神社に紫綾威鎧大袖付を奉納しており、海人族との深い繋がりが伺える。

よって、頼朝は海人族の統領とも言える存在であり、故に小早川氏は頼朝に仕えたのであろう。そして、頼朝はこれら海人族の水軍を自在に操ることができたので、天下をものにできたのだろう。これからすると、村上氏の系図が混乱して諸説あり、村上氏の祖を清和源氏にしていることは、実は頼朝の系統が海人族系であることを隠さんがためにされたとも推察できる。そして、三浦氏もまた、桓武平氏土肥氏の分枝とされており、小早川氏共々、家紋は神社の代

表的な神紋である左三つ巴であり、平家・源氏と単純に一般的に流布されている系図を鵜呑みにすることはできない。

③大内氏

毛利氏が長州を管轄する前は、大内氏が治めていた。大内氏の本姓は多々良（タタラ）氏であり、百済の聖王（聖明王）の第3王子の後裔と称していた。周防国府の在庁官人から守護大名を経て戦国大名となり、周防・長門、石見、豊前、筑前各国の守護職に補任され、最盛期には中国地方と北九州の6か国を実効支配した。

建武の親政に於いて、大内氏は周防守護職に任じられ、親政後は北朝側について足利尊氏を支援したものの、一時的に南朝に帰順したりして、最終的には北朝系の室町幕府に仕えた。

しかし、“百済王の子孫”を自負していた大内氏は、李氏朝鮮と独自の貿易を行って“日本国王使”に次ぐ“巨曾使（きょしゅうし）”と見なされ、また大陸の明との交易を独占して繁栄した。これが現在の山口県の独特の文化に繋がるのだが、幕府から危険視され、安芸の最大勢力であった毛利元就も反旗を翻し、最終的には毛利氏によって征伐された。

新羅は海部氏の祖が建国し、百済はそれに対する構造である。出自がその百済というのだから、現在の日本と半島との情勢を鑑みても何も変わっておらず、大内氏は國體のことなどは考えず、己の欲望に囚われ、風見鶏的に強者に組する一族なのである。

なお、落合氏に依ると、南朝勢力が海外進出するための武装商船隊が出航する基地を國體奉公衆が九州の港湾に造設し、これを護らせるために懐良（カネナガ）親王に征西將軍府を開設させたが、その將軍府に密かに協力するために、足利尊氏と弟の直義が「觀応の擾乱（かんのうのじょうらん、足利政権の内紛）」を起こしたとされる。そして、続く大保原（おおほばる）の戦いで足利軍は懐良親王率いる南朝側に敗北し、九州は南朝の支配下となった。これは、出航基地の護衛の側面を支援するために尊氏が配慮した結果だという。大内氏はこのような“裏取引”を知っていたかどうかは定かではないが、日和見的な行動からすると、知る由も無かったであろう。

*征西將軍（府）

西国、とりわけ九州を平定するため臨時に任命された將軍。その役所が征西將軍府である。

④毛利氏

さて、ようやく毛利氏である。ここまで見たように、毛利氏は海人一族（筆頭は海部氏）と関わる三島水軍・村上水軍や小早川氏と深い関係にある。そして、海部氏の新羅に対する百済系の大内氏を征伐した。では、毛利氏の血統とは？（http://www.yoshidacchi.com/bangai_001.html）

・第51代・平城（ヘイゼイ）天皇の第一皇子、阿保（アボ）親王と中臣氏系の侍女との間にできた子が大江音人（オオエノオトンド）。あるいは、大枝本主の嫡男とも養子ともされる。

この音人から10代後が廣元で、毛利氏の直接の祖とされ、その四男、季光（スエミツ）が相続した相模国毛利庄から毛利季光を名乗り、毛利氏初代となる。（大江は姓、毛利は名字。）

季光から2代後の時親（トキチカ）が、軍功により源実朝から安芸国吉田庄を与えられ、安芸毛利氏の初代となる。時親から8代後が弘元で、その子が元就である。

つまり、毛利氏は天皇家もしくは大江氏に繋がる。大江氏は土師（ハジ）氏の分派で、初めは大枝氏を称したが、音人から大江に改めた。土師氏は、第11代・垂仁天皇の御代に天穗日命の末裔とされる野見宿禰が殉死者の代用品となる埴輪を発明して天皇から土師職（はじつかさ）を賜り、その子孫が桓武天皇から姓（かばね）を与えられ、大江氏・菅原氏・秋篠氏に分かれていったとされる。改姓の理由として、土師氏は埴輪を発明して穢れの儀である葬送に携わってきたが、これが不本意であったためとされる。

菅原氏には菅原道真がおり、平安時代後期の有職故実をまとめた書「江家次第（ごうけしだい）」で有名な大江匡房（マサフサ）と並んで、学者の一族でもあるが、祖の土師氏は実は縄文海人とも言われる。縄文海人は南朝系を支えた國體護持系で、前述の武装商船隊などは彼らが支えていたのである。その海人の筆頭が、縄文海人と和平を結んだ海部氏である。（海部氏は南北朝時代、南朝を支持。）葬送に携わることが不本意というのは、このような真意があるからだとする、辻褄が合う。

すなわち、毛利氏は海人系故に水軍を操り、國體護持系故に系図的に天皇家と繋がるような伝承が残されているのである。毛利氏の長州藩は参勤交代の際、阿保親王の御陵（兵庫県）を必ず参拝したというから、毛利氏は阿保親王の血統とも言えるが、阿保親王が國體護持系から皇室に入れられたとも解釈できる。

毛利氏の家紋は一文字に三ツ星だが、阿保親王の生前の階位が三品（さんぼん）で、死後に一品（いっぽん）を贈られたことから、その“一品”を図案化したものとされている。しかし、これはシャンバラのシンボルに蓋をして封印しているカバラとも解釈でき、裏紋が皇室縁の桐なので、國體護持系ということである。

なお、秋篠氏だが、菅原氏が本拠地の大和国添下郡菅原の地名に因んで菅原姓に改姓したことに併せ、本拠地の大和国添下郡秋篠の地名に因んで秋篠姓に改姓した。その秋篠を関する宮家が現在、東宮家を支える構造になっているのは、あたかも土師氏が國體を裏から支える構造を暗示しているかの如くである。

小早川氏



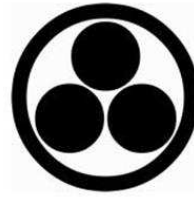
<http://kamondb.com/kika/tomoe.html>

毛利氏



<http://blog.goo.ne.jp/gemi2011/e/a39f423a4c499a44661f65994941a74b>

シャンバラのシンボル



(5) 部落と田布施、維新

① 部落

このように、毛利氏管轄だった田布施はイワキ山を拝する重要な地である。しかし、鬼塚英昭氏などに依れば、長州時代の朝鮮人被差別部落であり、維新後の日本で暴利を貪ってきた連中の土地という見解である。確かに、維新後の政府・官僚は薩長系が優遇され、現在、多くの政治家や官僚が腐敗している。また、鹿児島県の田布施（現・加世田市金峰町）も朝鮮系部落とされ、小泉元総理の父・純也はこの出身で、上京して小泉又次郎の婿養子となって小泉姓を名乗っており、その又次郎は全身刺青で大臣や副議長まで務めている。その小泉元総理は、郵政民営化で郵貯を米国に売り渡したとされる。そして、左派にとっては不利な右派的な政策を進める岸信介、佐藤栄作、安倍晋三は長州の田布施に関わる一族だから、このような説が流布するのも、さもありなん。

では、部落の本質とは何なのか？部落は、重要なことを隠すためには打ってつけの場所である。部落民の代表的なのは“四つ”で、四足の牛や馬などの処理に関わっていた人たちである。しかし、これを更に辿ると、神社で生贄として牛を捧げていた一族で、それは特定の祭司氏族に限られていた。いわゆる“血の穢れ”に関わることができた一族で、聖書で言うところのレビ族に相当する。だから、伊勢や丹波など、古代の重要な祭祀場所の周辺には、今や国内のみならず、世界的にも名を馳せる肉牛の産地があり、中でも古丹波に含まれる但馬は種牛の産地でもあり、そこから全国に和牛が広がっている。

それがある時期から生贄が禁止され、封印された。それが部落の始まりである。そこに、いつしか身分制の外にある人たちが合流し、更に罪人や朝鮮系渡来人が合わされた。そうすると、必然的にその場所は忌避され、自然と人々が近付かなくなる、というシステムである。当然、その管理人たる人たちも配置されるわけで、それが國體護持系である。

何も知らずにそこに居る人たちにとっては、ある意味、差別の対象となって酷なことで、故に、部落解放後は職種等の優遇が行われてきたのだが、真相を知って受け継いでいる者たちにとっては、いつかその時が来る、と待っているのである。

②江戸時代の身分制度と卒族、維新の目的

江戸時代、武士は禄高に応じて常時抱えておくための、傭兵や馬の世話をしたり槍を持たせたりする従卒が必要だったが、彼らは農民や商人以下の身分で、中間（ちゅうげん）・小者（こもの）と言われた。また、足軽のような同心は半武士的存在で、卒族と言われた。以下、落合氏の著書に詳しいが、特に長州は、大内氏と山名氏が半島から多くの傭兵を駆り集め、その子孫は武士にも百姓にもなれず、卒族が他地域と比べて多く居て、彼らを抑えるのが毛利氏の役目であり、その半島由来の人たちの中には、田布施の部落に居住した者も居たのである。また、長州は地勢的に出島にも近く、イエズス会を通じた西洋霸道一神教に因る國體破壊工作の影響を受けやすい場所でもあった。

維新の根本目的は、開国の衝撃がもたらす国の分裂を避けることであり、そのために必要とされたのが中間・小者を士族に入れる身分解放で、併せて、卒族の士族への昇格も必要とされた。それにより、破壊的革命が起きないようにすることであった。すなわち、維新の目的は、彼らの不満が爆発して国が分裂するような危機が起きないようにするための、新士族を創ることだとも言える。そのため、戊辰戦争等で彼らに手柄を立てさせ、新士族へと編入したのである。

③維新後の卒族

維新後、新士族となった卒族は、大内氏と性格を同じくする山縣有朋に感化されてか、あるいは勘違いしてか、権力に酔いしれ、それを追求する者たちが現れた。そこに薩摩系の一部も加わり、帝国陸軍や政府、官僚の内部に蔓延り、権力やカネのためには国をも売るような行為を恥ずかしげもなくする連中が現れた。彼らこそが、2.26 事件などの陸軍のクーデターや現在に繋がる政治家や官僚腐敗の原因なのである。

④田布施とは？

田布施の祭祀構造と部落構造が明らかとなったわけだが、そこで護られてきたのは南朝の血統と維新を陰で支えた一族で、木戸孝允、伊藤博文、そして、戦後の岸信介氏、佐藤栄作氏、安倍晋三氏の一族であり、國體護持勢力である。南朝の血統とは、海人が支える王家の血統である。そこに卒族系が加わっているのが、真相が見えなくなっているが、重要なイワキ山を拝する構造で真相を暗示しているのである。

⑤國體護持とは？

國體とは、天皇に依る統治システムであり、究極には天皇の御存在である。天皇とは、シュメール王家からイスラエル王家を経た王家であり、世界最古の王家であって、しかも遙か昔から権力と切り離された権威的存在である。だからこそ、御存在自体が尊いのであり、日本国にとって、ひいては世界にとって、國體護持は最優先されるべきことなのである。それを支えてきたのが國體護持組織であり、海人系が協力してきた。

小泉元総理は、郵政民営化で郵貯を米国に売り渡したとされるが、その裏では人工的大災害との駆け引きがあったと仄聞する。それ以前では、不沈空母発言のあった中曽根内閣の時、米国経済立て直しのために迫られた円高ドル安を当初は断ったがために、御巢鷹山に旅客機を墜落させられ、それで止む無くプラザ合意をのみ、その後のバブル及びその崩壊を甘んじて受け入れたとも漏れ聞く。これらによって、日本は大きなダメージを受けたものの、国が分裂したり、國體が崩壊するような危機には至らなかった。

また、保守に対抗する旧社会党や日本共産党も、実は國體護持のために創設された。維新後、いずれ入り込む共産主義思想のガス抜きと、国土が本格的に共産化しないようにするためであり、これは維新と目的を同じくする。共産主義とは、ごく一部の者が富を握り、大多数は“平等に”貧しい制度で、西洋覇道主義の別の形態である。

そして、平成 27 年、田布施に関わる安倍内閣によって、自虐史感から脱する歴史的な戦後 70 年談話が閣議決定され、また、清濁併せのみつつも安全保障が見直されて憲法改正、すなわち、国際金融資本に依る経済的・精神的植民地支配から脱して真の独立国家へ戻るための道筋がつけられた。(江戸時代までは、天皇を中心として人々が己の役目を全うし、独自の先進文化が花開き、世界に先駆けて為替相場制を実践していたことなど、文化的・経済的に完全な独立国家だった。) これにより、日本がいよいよ世界の盟主として、表に出て来る時期が近づいてきたと思われる。

何故、日本が世界の盟主たり得るのか？かつての日本は、天皇が親、民が子の関係のいわば「天皇制社会主義」だった。それは、誰かが誰かを搾取するという構造ではなく、この宇宙に適した“共生き”の社会構造故に、日本は世界の範たり得るのである。それを、吉田松陰は“一君万民の世”と言った。